

ジャパ(ネパール東部)のキャンプを視察

医療環境への援助が急務

【ネパール・ジャパ26日

大島範之】医者がいない、ベッドがない、薬が足りない。青年部「難民調査団」の長野祐樹団長(青年平和会議議長)ら一行は、二十三日(現地時間)、ネパール東部ジャパ地区のフータン難民のキャンプ地に近いAMD A(アジア医師連絡協議会)の病院などを視察。厳しい医療環境の現状を目の当たりにした。

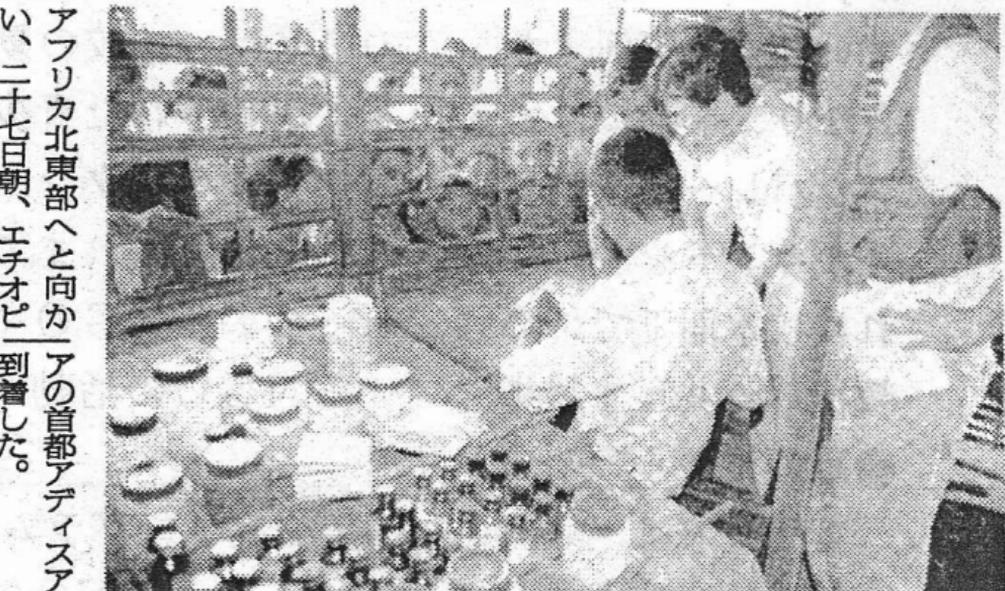
病院の門をくぐると薬局や渡り廊下、玄関脇にまで治療を待つ人があふれている。薄暗い病棟では、廊下にもベッドが並ぶ。夏場はマラリア、日本脳炎、赤痢の患者が多い。ハンセン病に侵された人もいた。外気温は摂氏四〇度近い。扇風機がかきまわす、暑くよどんだ空気のなかで、患者たちは言葉もなく身を伏せていた。

ベッド数三十に対し入院患者が六十、約七割は難民である。外来患者には地域住民も多いが、その数はここ数年で三倍にも増えた。AMD Aの医師が懸命に治療にあたるが、医療環境はあまりにも厳しく、難民キャンプとその他の地域住民への医療援助が急務である。病院の待合室で調査団のメンバーの一人が、難民の患者に対して「ナマステ」

と合掌すると、その老いた患者も弱った身体を立ち上げらせて「ナマステ」とほほえみ返してきた。身体は病んでいても、その精神は穏やかで、心には垣根がない。同じ人間として彼らに對しできることは何か。その素朴な患者の表情が、調査団メンバーの心を強く揺さぶった。

◇

調査団一行は二十四日(同)には、ジャパ地区のメチ県病院を視察し、医療援助の一環として「心電計」の目録を贈呈。また、同地区滞在中に二つの難民キャンプにも足を運び医療棟などを視察した。



ネパールでの日程を終え、アフリカ北東部へと向かい、二十七日朝、エチオピアの首都アディスアベバに到着した。

調査団はジャパ地区にある難民キャンプ内の医療棟へ。その薬局には、取り囲むように人垣ができていた